

斎藤美奈子氏  
文芸評論家



## お薦めの3点

▽辻原 登『黒髪』

▽佐藤 哲也『沢蟹まけると意志の力』

(新潮社)

(講談社)

▽榎 敦子『行為としての小説』

(新曜社)

フィクション・ノンフィクション

という制度的な区分を、私たちは自明のように思っている。だからこそ

『黒髪』みたいな作品に出あうと、足元のはしごを外されてオタついてしまうのだ。語ら

らぼうに提示する。①は新聞記事などを再構成する形で。②は友人が遺した講義録を転用する形で。

近松淨瑠璃から私小説、ノンフィクションノベルまで、虚実のあわいを描くのは文学のオハコみたいに思

いがあり、読み手は緊張感をおぼえずにいられなくなる。

『沢蟹まけると意志の力』は、これはオフザケ小説ですよ——と主張しすぎた装丁と帯がよくない(登場人物の姿を表紙に漫画で入れちゃう

れる内容は二つ。

①一九九四年に福岡でおきた美容師

# 「小説」を拒む切実さに緊張感

バラバラ殺人事件と、②万葉集から地唄の「黒髪」を経由して大岡昇平『花影』にいたる「黒髪文芸史」ともいべき構想をもつていた亡き友の話である。ともに実話であるらしく①②を、語り手の「私」はぶつきだ。そこには何か切実な匂(にお)

れてきた。だが『黒髪』はその流れにむしろ逆らおうとする。「私は『これは小説ではない』と何度も念をおし 小説らしい体裁にまとま

るのはどうかな)。「意志の力」という語は、ナチスのプロパガンダを彷彿(ほうふつ)させる。じじつ、この小説は、サワガニの子として生まれた超軟弱なヒーロー「沢蟹まける」の成長(といふ設定だけでも人を食

かかもしれない。そんな語りのしくみをていねいに解きあかしたのが『行為としての小説』。漱石の『草枕』、鷗外の『雁』、谷崎の『丑』、井伏鱒二の『黒い雨』、だれもが知つてゐる四つの小説を語りの行為といふ視点で読み直し、物語をあやつる語り手の存在にせまつている。

つてゐるけれど)をたどりながら、戦争と戦争の語り方をこれでもかと口ってみせるのである。本物の戦争、猿蟹(さるかに)合戦式のフォーカロア的戦争、企業戦士が汗水たらす現代の戦争、特撮ヒーロードラマの定番である秘密結社の世界征服計画。機関銃のようになりだされる言葉数は圧巻。見かけ以上に硬派な戦争風刺文学だとあえていつておこう。右二作が示しているのは、小説は語りのパフォーマンスだという事実